

Title	ピエールの"回心"
Author(s)	福岡, 和子
Citation	英文学評論 (1993), 66: 61-77
Issue Date	1993-12
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_66_61">https://doi.org/10.14989/RevEL_66_61</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# ピエールの“回心”

福 岡 和 子

「これら二つの本（『白鯨』と『ピエール』）は大地と霊との間に生まれた子供である人間が、父なる神によって廃嫡され、天を攻撃することによって、自分の天上性を証明しようとする姿を描いているのである。」<sup>1)</sup> これは『コロンビア・アメリカ文学史』のなかの記述であるが、W. ソープ以降の大方の『ピエール』論を代表しているといえることができる。批評家達は、若者ピエールと捕鯨船の老船長との違いを認めるにしても、ピエールの挫折と怒りを、天を攻撃するエイハブの形而上的、宗教的行為の延長線上にあるものと見て来たのである。それは言い換えるなら、エイハブ、ピエールら作品の主人公の苦悩を、作者メルヴィルのそれと重ね合わせるものでもあった。『白鯨』に関しては、語り手イシュメルの存在を重視することによって、エイハブと作者との間に相当の距離を置いて見る批評姿勢が既に十分定着したといえるのに対して、『ピエール』の場合はいまだそうではなくて、ややもすると主人公と作者が簡単に重ね合わされてしまうきらいがある。確かに、メルヴィルの伝記的事実（独立戦争の英雄であった祖父のことや、隠された異母姉がいたらしいことや、若きメルヴィルが職業として作家の道を選んだことなど）と、ピエールのそれとの共通性が、その傾向を助長しているのであるが、本稿では、ピエールをエイハブやメルヴィルとは切り離して、もっと広い枠組みにおいて捉えることを前提としたい。

それはこれから見ていくように、ピエールは、作者の個人的苦悩を体現するというよりは、アメリカ19世紀前半の文化的特質を踏まえて創造された登場人

物であると私は考えるからである。後に詳しくみるように、その時代は宗教と切り離すことができない時代であった。当時は宗教が社会のすみずみにまで浸透し、宗教、政治、経済、教育、道徳、といった区分けを越えて、価値意識、概念化、つまり人々の考え方全般を左右していた時代だったと言ってよい。そこで我々はまず、ピエールの宗教意識というか、今述べた広い意味での思考傾向の検討から始めていきたいと思う。

### (1)

次の引用は、ピエールの宗教的思考傾向の特色を何よりもはっきり示している。

ピエールの若葉茂る心のなかに、長い間ひとつの神殿が祭られていた。……しかしそのように若葉におおわれ、花輪が掛けられているにもかかわらず、この神殿は大理石でできていた。壁龕のある柱が……彼の精神生活という神殿全体を支えていたのである。……その壁龕の中には、亡くなった父の完璧な大理石像が立っていた。それは傷一つ無く、真っ白な雪のごとく清潔な澄み切った立像であり、人間に備わる完全な善性と徳性を具現する愛しいものであった。この神殿の前に、ピエールは若き人生の最も敬虔な考えや、信仰のすべてを注ぎ込んだのである。ピエールが心の中で神に向かうのも、必ずまず父の神殿の階段を上り、そこを最も抽象的な宗教の入り口として通ってからのことであった。<sup>2)</sup>

この一節は、もちろん父親に対する息子の心情を述べたものだが、親に対する子供の一般的な気持ちとは非常に掛け離れたものであるということが出来る。それはピエールにとって父親が祭るべき神にも匹敵する存在であったということである。いやもっと正確に言えば、ピエールの神に対する信仰は、父に対する信仰というものがあって始めて成立している。さらに父に捧げるそのような信仰は、父の道徳性が一点の曇りもなく、完璧であるということに依拠してい

るのである。ピエールにとって父は「完璧な人間の善と徳を具現する」「聖人」であったのである。

さらにピエールの敬愛する祖父に対する場合も例外ではない。

祖父の肖像画は、天使の言葉が持つ天の説得力を持っていた。額にはめられ、壁にかけられた輝かしい福音は、山上の垂訓さながらに、人間は気高く神のような存在であり、最高の体液が満ち、力と美を兼ね備えた存在であることを告げていた。<sup>3)</sup>

ここでも驚くべきことに、人間が神と同じ位置にまで高められている。この言い回しをよく読むと、もはや特定の人間が神のようだという比喩的段階を越えていて、祖父はキリストとなって、ピエールに山上の垂訓を垂れる存在として映っている。ピエールにとっては、神のイメージは祖父を通じてしか浮かんでこない、言い方を変えると、神を人間の地位にまで引き寄せ、神と人間の距離を無きに等しいものにしてしまっているといっても言い過ぎではないだろう。

さらに注目すべきは、以上述べた人間に対する過剰なまでの信頼は、彼自身の場合でも例外ではないことである。息子が成長していく過程で必ず体験すると言ってよい、親に対する苦い失望とか諦め等の感情において、ピエールの示す反応はおよそ普通ではない。フランス人女性と関係を持ち、密かに子供まで産ませていたという、今や否応無く仮面を剥がされた父親像に、ショックで身を震わせながらも、ピエールは「少なくとも僕だけは残った」とつぶやく。つまり、神であった父がその位置から落ちてしまった今、今度はピエール自身が、キリストとなって生まれ変わり、すべてを犠牲にして父の罪を償おうとする。ちょうどキリストが人間の罪を償おうとして、進んで磔刑に処せられたように。無意識的欲望がどうであれ、少なくともピエール自身はそのように考えて、何不自由ない安定した生活、愛するルーシーとの結婚など、自分の幸せを犠牲にして、姉イザベルとの偽装結婚という途方もない道行きに踏み出してし

まうのである。

(2)

これまでピエールの宗教的思考傾向を追って来たわけだが、その特異性は既に十分明らかであろう。“キリスト”ピエールにとって、父の汚れた秘密を母や世間の目から守り、かつイザベルを公に認めさせるという、およそ両立は難しい計画が偽装結婚という手段によって実行可能だと考えられたのであった。しかしそれが実行に移されるやいなや、ピエールの高揚した気分も急速に引いていき、自分の取った行動に対する疑惑や、その行動を取らせた神に対する不信や怒りに苛まれ始める。果ては、近親相姦、殺人といった、これまた驚くべき結果を産むに至る。自分をキリストと考えてすべてが可能だと思い込んだピエールは、あまりに未熟かつ愚かだったのか、それとも一時的陶酔に我を忘れてしまったのか、恐らくそのいずれでもあるのだろうが、それにしてもメルヴィルがなぜわざわざそのような人物を主人公にしたのかとの疑問が残る。当時の読者は出版された『ピエール』を読んで、とうとうメルヴィルは本当に気が狂ってしまったのだというような書評<sup>4)</sup>を書いたのも、分からないではない。そこにはピエールという登場人物と彼のとった行動を理解できない困惑があるに違いない。したがってピエールをどう理解するかは、当時の読者のみならず、現代の読者も十分理解してきたとはいい難いこの作品の解釈に、きわめて重要な意味をもっているといっても言い過ぎではないだろう。

しかし、実はメルヴィルはそのための鍵を作品中に周到に用意しているのである。何回となくピエールにたいして用いられる“enthusiast”“enthusiasm”という言葉がそれである。その代表的な例が、先に触れたピエールのキリスト宣言を含む次の文章である。

イザベルを庇護し支えるようにという神の命を受けて、ピエールは一切を捧げて神に尽くす気持ちになっていた。……彼が……自分にとって大事なもののすべてを犠牲にするという、ほとんど人間を越えた覚悟をしているときに、それらが彼の偉大な熱狂的決意 (enthusiast resolution) を妨害するようなことがあっても、ピエールは月並みな慣習的配慮など……蜘蛛の糸ほどの軽さには感じなかったであろう。……高邁な熱情 (high enthusiasm) から彼は受胎したのだ。……このように義務に対する熱狂者 (Enthusiast to Duty) の中に、天上生まれのキリストが宿ったのである。彼は人間の親を親とは認めず、人間との絆のすべてを軽蔑し、断ち切ってしまう。<sup>5)</sup>

このようにメルヴィルが主人公に対して“enthusiast”という言葉を繰り返し当てはめていることに着目した場合、ピエールを単なる小説中の一人物としてではなく、ひとつのタイプとして一般化、概念化された造形として捉える視点が開けてくるように思う。それは言い換えるなら、ピエールを単に作者の個人的問題を体現する主人公としてではなく、もっと広い文脈において考える必要があるということである。というのもその言葉が、キリスト教史上、特別の意味をもった言葉であるからだ。<sup>6)</sup> とりわけアメリカ宗教史上においては、特定の対象に対して、具体的な状況において、繰り返し現れて来た言葉なのである。以下、その具体的な例を見るために、我々は一時『ピエール』を離れて、アメリカ宗教史を探ってみなければならない。

### (3)

まず、我々が“enthusiasm”という言葉との関連で注目する必要があるのは、1740年代に起こって来た“大覚醒”(the Great Awakening)と称される信仰復興運動(Revivalism)である。それはJ. エドワードやG. ホワイトフィールドらを中心とした、福音主義(Evangelism)と総称されるプロテスタント改革の一つである。福音書を真理として受け入れること、それによって救済さ

れたとする個人の意識に重点を置いた、言い換えるなら、聖餐を授ける教会や僧侶の役割ではなく、救世主としてのキリストを個人的に体験すること、つまり“回心”に重点を置いたものであった。とくにこの“大覚醒”は、いわゆる“理性の時代”にあって、教義を合理的に説明しようとする傾向に対する反動として、また、形式に墮してきた牧師たちの宗教行為に対する反動としての意味を持っていた。つまり彼らは既成の教会制度に揺さぶりをかけたわけだが、その一方で、彼ら自身の“enthusiasm”はその過剰ゆえに、他から揶揄、嘲笑の対象になったのである。

A. ハイマートによると、例えば、C. チョンシーは、エドワードを直接攻撃した『四季随想』(Seasonable Thoughts)の中で、『人間悟性論』、とりわけロックが“enthusiasm”は一種の「精神的病い」だといっている箇所に依拠して、リヴァイヴァリズム批判を行った。その後ますます、リベラル派の批判には、“enthusiasm”を“狂気”と結び付けるディスコースが目立ってきたという。1740年代後半、J. メイヒューは説教のなかで、「覚醒した (awakened)」と主張している人々は、実は「目覚めた愚か者 (enlightened Ideots (sic))」であって、

狂乱と愚行と妄想をすべて神霊の賜物と信じた哀れで不幸な人々は、実はただ頭が狂っているだけなのに、自分自身は回心したと信じているのだ。<sup>7)</sup>

と語っている。こうしたことから分かるように、リヴァイヴァリストらの受けた“enthusiasm”批判は、彼らが体験したと主張する回心そのものの信憑性に対する疑問なのである。自分たちでそう思っているだけで、実は感情の異常な高ぶりに過ぎず、真の意味での回心ではなかったのではないか、といった疑問やかからかいが、“enthusiasm”という言葉には込められていたのである。

次いでアメリカ宗教史上、“enthusiasm”“enthusiast”という言葉が、特別

の意味を持って使われるのが19世紀前半なのである。それはほとんどアメリカ全土を呑み込んでしまった、いわゆる“第二覚醒運動”(The Second Awakening)である。P. ミラーの「エマソン、ソロー、ホイットマン、メルヴィルにとって、これ(the Revival)が、彼らの社会における一つの明白な真実であったということを理解しないならば、ほとんど彼らを理解することは不可能である。」<sup>8)</sup> という言い方が示すように、メルヴィル、特に『ピエール』を理解しようとする我々にとって、この19世紀のリヴァイヴァル現象を正しく理解しておくことが不可欠である。したがってここで少し詳しくその特徴を検討してみたい。

まず第一の特徴は、人間の意志の自由(the freedom of the will)を認めたことである。18世紀の大覚醒と、19世紀の第二覚醒とは、福音書を真理として受け入れ、回心を重視する点など、共通点もちろん多いのだが、その違いはもっと重要である。W. マックロックリンは、それを“Evangelical Calvinism”から、“Evangelical Arminianism”への転換と捉えている。<sup>9)</sup> つまり第二覚醒は、運命予定説(the doctrine of predestination)、すなわち自分自身の救いを生じさせることに関しては、人間は全く無力であるとする教義を完全に覆してしまったのである。言い換えれば、人間の自由意志が強く主張されるようになり、人間は神が望まれることを自分の意思によってすることが可能だと考えられるようになったのである。マックロックリンは、こういう前提から、人間自身の自由意志によって人間も社会も完全なものになることも不可能ではないという、「完全論」(perfectionism)や「至福千年を信じる楽観主義」(millennial optimism)につながっていったと言う。<sup>10)</sup> この時期ニューイングランドを中心にして、組織的な改革運動が、どの時代にも増して活発に広まっていったことはよく知られているが、その基盤をなしていたのが、以上見た宗教的意識の変化だったのである。

第二の特徴は、神、キリストの捉え方が変わったことである。神は、怒れる

神ではなく、人間を愛する神、人間を守り、導く「やさしい羊飼い、案内人」<sup>11)</sup> となった。また、キリストは神よりさらに一層人間に近い存在となった。人間への愛のために我が身を犠牲にしようとしたキリストは、「自らの意志で」「人間として」苦しむべくこの世にやってきたのだと考えられたのである。マックロックリンは、「神と、その子供達との仲介者」としてのキリストは、その人間性と行為の自発性が強調された結果、信者にとって自己犠牲の手本になったと指摘している。<sup>12)</sup>

第三の特徴は、リヴァイヴァリストたちが、理性ではなく心あるいは感情に訴えたという点である。人間は確かに神が望むことをすることが可能で、「正しい選択」をする能力を持っている、ただ神の助けを必要とする、そこに説教師の働きかけの役割があると考えられたのである。神は、説教師を通して「人間の心に訴えかけて」目覚めさせ、人間は神の申し出を受け取ろうとする明確な意志決定によって、それに答えるのである。

この「心に訴えかけて」目覚めさせる方法とそれが信者にもたらした効果については、同じリヴァイヴァリストといっても、中西部を中心とした C.G. フィニーらと、ニューイングランドを中心とした N.W. テイラー、L. ビーチャーらとは、少し隔たりがあった。1823年にフィニーのもとに集まった人々は、「あまりに興奮して、ショックとエクスタシーのあまり、文字通りいすから転げ落ちた」という。<sup>13)</sup> ミラーも、「集団的規模で、信じがたい“運動”が次々と起こってきた——倒れたり、わめき立てたり、体を硬直させたり、転げ回ったり、走ったりしたのである。」と、書いている。<sup>14)</sup> 信者は「電気の波 (the wave of electricity)」が、彼らの体を貫くことを願ったのであった。<sup>15)</sup> フィニー自身、彼の回心において、「電気の波 (a wave of electricity) が、体を貫通して行くような印象を持った」と述べている。<sup>16)</sup>

一方テイラーらは、リヴァイヴァルがこのように“enthusiastic”“fanatic”になることを大変恐れたという。自分たちの信仰におけるこのような感情過多

を、カルヴィン派が突いてくるのは目に見えていたからである。というのも感情的興奮に疑問を抱くカルヴィン派は、回心とは「長いゆっくりした精神的再生の時間を経て」起こるものだと考えていたわけで、ビーチャーらは彼らの批判と嘲りをかわすために、回心したと主張する人々を教会に加える前に、4-6カ月間「習練期間」を与えて注意深く調べたという。<sup>17)</sup>しかし、フィニーの方法に対するビーチャー側の警戒や敵意にもかかわらず、ミラーの指摘するとおり、結局は1831年フィニーが、ビーチャーの牙城ボストンへ、外ならぬビーチャー自身の招きで入って行ったのである。<sup>18)</sup>言い換えるなら、彼らの方法や程度に違いはあるものの、永罰と救済との相違は、教義的定義の相違ではなく、「心、または感情がこれらの真実を受け取る仕方の相違、あるいはそれを考えて行動するやり方の違いにある」<sup>19)</sup>と説くフィニーの考え方は、リヴァイヴァル全体に共通するものだったのである。そしてまたそこに、ユニテリアン派、カルヴィン派といった、リヴァイヴァリズムを批判する側の不信や批判も集中した。つまりこれまでにない規模で生まれてくる回心体験に対する疑惑もそこを根拠にしたものであったのである。

## (4)

さて前章で、我々は“enthusiasm”“enthusiast”という言葉を手掛かりにして、『ピエール』と19世紀前半のアメリカ社会との接点を探ってきたわけだが、その接点に立って改めて作品を読み返してみると、今まで気がつかなかったものが、はっきり焦点を結んでくるように思われる。中でも、事の発端となったピエールとイザベルとの出会いが持っている意味である。メルヴィルは、その出会いを単に人間的なレベルでの一挿話ではなくて、ほかならぬピエールの宗教的“回心”の契機として描きたかったのではないだろうか。そしてそこには、ピエール個人の特異な体験ではなくて、我々が見て来た19世紀ア

アメリカ的な“回心”の持つ問題点を浮き彫りにしようとしたねらいがあったのではないだろうか。従ってイザベルの出現に対するピエールの反応を、無意識的性的欲望の次元でのみ捉えようとする（それが、あながち読者の恣意的な解釈とばかりは言えず、テキストそのものにそのような解釈を許容する要素があったとしても）、作品の持つ重要な意味を読み落としてしまうことにはしないだろうか。メルヴィルはそこに無意識的欲望が作用していたことを仄めかす前に（というか同時に）、宗教的な意味合いをも十分書き込んでいることを忘れてはならないのである。

まず第一に、ピエールの回心的体験は、リヴァイヴェルの回心の最大の特徴、つまりほとんど瞬間的な、全身が揺さぶられるような激しい感情に襲われて始まっている。ピエールが訪れた村の慈善裁縫会において、あの「神秘的顔」に出会い、あの「デルフォイの神託のような叫び」を耳にした瞬間、彼は「存在の最も奥深い根源を捉えてしまった」ような感情を経験したと語られる。<sup>20)</sup>このような唐突で不思議なイザベルとの出会いの後、彼女から手紙が届くが、その結果、ピエールは過剰ともいえる反応を示し、ほとんど瞬間的にイザベルを姉と認知してしまう。異母姉の出現という思いがけない出来事を前にして、ひとまず果たしてそのようなことがありうるかどうか疑ってみるとか、信頼すべき筋にその信憑性を確かめる等という冷静さはいささかも見られない。理性的推論の過程を経ずして、直感と激しい衝撃に突き動かされてイザベルの手紙を信じてしまうのである。それは語り手が仄めかすように、ピエールが既にイザベルの美しい顔に一目ぼれしていたことも一因であろうが、それより何よりも、既に述べた完璧な父親像が崩れ落ちたことへの強烈なショックを受けた反動であることは言うまでもない。「彼の道徳的存在のすべてが今やひっくりかえってしまったのである。」<sup>21)</sup>

以上のような瞬間的、衝動的反応は、同時にピエールに精神的な急激な変化を経験させる。イザベルとの出会いを契機として、ピエールはそれ以前には見

えていなかったものが見えるようになり、それまでは存在さえ知らなかったものに気づくようになったのである。その一つは、あまりに恵まれて育ったためにピエールにとって全く無縁だった苦悩、孤独、貧困などの存在である。また、父が母以外の女性との間に子供をもうけていたという事実（と言えるかはもちろん読者には確かめようもないのだが）を通して、初めて人間の犯しうる罪の存在を知ることになったのである。さらには、誤りを犯してしまった者や、自分の意に従わない者に対する母の冷酷な処遇から、「聖人」ではなく、「生まれと富と潔癖さを誇る」母の真の姿を、また、金と地位を備えた村の権力者である母におもねって、自分の地位保全に汲々としているフォルグレイブ牧師の偽善など、次々とピエールは知ってしまう。彼を取り囲むすべてのものの偽りの仮面の下に潜む実体を、このように一瞬にして直感してしまったこと、それがピエールの“回心”なのであるが、それに語り手は、我々にとって既になじみの言葉である「彼の心を貫いた電気の光線」とか、「電気の嵐」<sup>22)</sup>といった表現を与えていることにもここで注意を促しておきたい。

しかしこのような体験を“回心”と呼び得るのは、何にも増して、ピエールがイザベルの訴えを、「彼女の所に飛んで行って、この世で最高の最も輝かしい義務を果たすようにと命ずる、押さえがたい紛れも無い神の声」<sup>23)</sup>と感じ取ったからである。イザベルからの“心”に向けての訴えかけに、ピエールは神の命令を聞いてしまったのである。このようにピエールとイザベルとの運命的な出会いを焦点として、当時のフィニーを中心としたリヴァイヴァルによってもたらされた“回心”のさまざまな要素——人間の完全性への信頼、心への激しい訴えかけ（それは取りも直さず自分の心の激しい応答でもあるのだが）に直ちに神の命を感じ取ってしまう心的傾向、自己犠牲という最高の美德などが結びついていく。ピエールの選択は「ルーシーかイザベルか」<sup>24)</sup>という二人の女性の間を選択することではなく、ピエール自身が言うように「ルーシーか神か」の選択、つまり回心の成就だったはずである。

さて、以上のようにピエールの辿った変化をリヴァイヴァルの典型的回心の典型と考えるならば、また後半の彼の陥る状況もよく理解することができるのではないだろうか。父に成り代わってキリストとなる決意をしたほどの瞬間的な気分の高揚は、これまた急速に衰えてしまう。イザベルに対する性的欲望の自覚は、彼の行動をそもそも促したはずのイザベルやデリーに対する思いやりをも急速に冷えさせてしまう。特に作家を志してからのピエールは、「世界が驚き、歓喜して迎えるような本」を書こうとしているにもかかわらず、専ら自分の殻の中に閉じこもり、ほとんど閉塞状況にあるとあってよい。彼の意識の中には、他者への関心、外なる世界へ向けられた冷静な分析など入り込む余地は全くといってない。

こうした閉塞状況がどうして起こってくるのか。それは彼が今何よりも解決しなければならない問題が、もはやどうすればイザベルを幸せにできるかではなくて、自分を現在の状況に追い込んだ“回心”の真相、すなわち自分の“心”の中を探ることにあるからである。言い換えれば、イザベルとの出会いにおいて彼の心を刺し貫いたあの「電光」の正体は何であったのかを知ること、それを明らかにすることができない限り、先へは進むことができないからである。しかし、ピエールは、語り手の言う「太陽の一番外側の軌道を越えた物質空間に突き落とされる方がまだましな」「自己の内側を浮遊する」<sup>25)</sup> しかない状態に追い込まれているのである。そして語り手が言うように、「人間の心は恐ろしいまでに広漠として何も無い」のだとすれば、そこを浮遊する人間が捕まり得るものは何もなく自滅するしかない。それは、永罰と救済との相違は「心、または感情がこれらの真実を受け取る仕方の違いにある」とした、あのフィニーの考えを、根底から突き崩すような「そら恐ろしい」「心」の捉え方である。さらに、ピエールが探っていく“心”を、「石棺の蓋を開けると、そこにはだれもいなかった」<sup>26)</sup> と表現する語り手は、当然、実はそれが福音書のなかではキリストの復活を見届けた喜びの表現であったことを意識していたはずで

ある。とすれば、語り手はその喜びの表現をここでは悲しみと恐怖の表現へと逆転させる事によって、実は回心においてキリストの存在を知覚する“心”の働きを何にも増して重要視するリヴィヴァルへの痛烈な批判を行っているといえるのではないだろうか。

## (5)

最後にもう一度まとめるならば、メルヴィルは“enthusiasm”を主人公にすることによって、「その時代を支配した精神」<sup>27)</sup>であったリヴィヴァリズムそのものをテーマにしたと言える。それがいかに困難な試みであったかを理解するには、我々は、ミラーのいう「リヴィヴァルの恐るべき普遍性」<sup>28)</sup>を認識する必要がある。すなわち、リヴィヴァルは単にキリスト教内の一宗派の運動ではないということである。それは、南北戦争に至るまでの19世紀アメリカ人の意識構造の中に深く組み込まれ、彼らの考え方、行動を支配していた、宗教というよりはイデオロギーといった方がいいものであった。つまり、牧師の説教のみならず、学校の教科書、日曜学校の教科書、親のしつけ、『ピエール』にでてくる慈善裁縫会といった地域活動の形をとって、日常生活、家庭の中に入り込み、当時の人々の心的傾向を形成していったといえることができる。したがってメルヴィルのリヴィヴァル批判は、特定の一新興宗教への批判などではなくて、既に人々が疑いもせず自らのうちに深く潜ませてしまっているものを、拡大鏡をあててその心の内を凝視させるような試みだったと言えるかもしれない。

我々は、メルヴィルがリヴィヴァルをテーマにしてこの作品で行ったことを確認するために、最後に『広い広い世界』<sup>29)</sup>と比較しておきたい。『広い広い世界』は、『ピエール』(1852)の2年前に出版されて、『ピエール』とは対照的に、たった2年で14版を重ねた当時のベストセラーである。作者スーザン

・ウォーナーは、メルヴィルと同年(1819)に生まれ、1844年に回心を体験し、日曜学校で教えた経験も持つ、いわばリヴァイヴァルの活動家である。従って彼女の作品は、彼女が The New York City Tract Society の“Visiter (sic)”として、家々を訪れて配って歩いたパンフレットと同じ宗教的性格をもっているといっても言い過ぎではないだろう。

その作品の中では、母と死に別れ父とも別れて、ただ一人世の中に出たヒロインが、何人かの指導者に導かれながら、完全なキリスト教徒という目的に向かって、文字どおり涙ながらに大変な努力を重ねて行く。指導者アリスとジョンは、ヒロインがひたすら神に祈ることによって、自己犠牲という美德を身につけること、つまりプライド、憤り、寂しさ、屈辱感などを抑える自己抑制を説くのである。このように、作品は小説というよりは、宗教的出版物のジャンルに入れてもおかしくないほどの宗教臭さを備えている一方で、実は同時に全く別の見方も可能なのである。

J. トンプキンズは、この小説がいわゆる“training narrative”に似ていることを指摘している。<sup>30)</sup> つまりドキュメンタリーや、テレビ映画によくある話——孤児の少年が優しく厳しいコーチの手ほどきを受けて偉大な野球選手になっていく話とか、少女がポリオを克服してスケートのスターになっていく話である。このトンプキンズの指摘は実に興味深いが、その指摘の重要性に彼女自身気づいていないように見える。つまり一見濃厚に見える宗教臭さにもかかわらず、実は物語は、神という超越的存在と人間の関係というよりは、少年と野球コーチ、少女とスケートコーチの関係の次元で展開しているということである。つまり繰り返し人々の口に上るにもかかわらず、神の存在はむしろ希薄であって、エレンが毎日の生活で遭遇する困難をいかに乗り切っていくか、そのためにはいかに自分を捨てられるか、そのみが問題だといっても過言ではない。従って、「自己犠牲」という宗教用語よりは、「自己抑制」といった精神分析用語の方がむしろこの場合ぴったりするほどである。エレンがキリスト教的

救いを得られるかというよりむしろ、どうすれば彼女がこの地上で幸せを得られるか否かが問題なのである。

さらに我々の興味を引くのは、ヒロインと精神的指導者との関係が、もちろん信仰によって結び付けられているようにみえるのであるが、実は、少女とコーチとの関係よりもっと親密な、親と子の関係に近いということである。エレンにとって彼らは孤独な心の空隙を埋める母の代わりとしての愛の対象なのである。エレンは彼らのいうがまをすることによって、必死になって彼らに愛されることを願っているのである。こうしたエレンの神への愛を、きわめて人間的な愛と区別することは難しい。指導者たちは神のほうをより強く愛するように言うけれども、エレンは常にアリスとジョンという生身の人間に対する愛を通じてしか神と結び付いていかない。アリスとジョンはエレンによって姉と兄と呼ばれるし、また小説の最後にはエレンとジョンの結婚さえほめかされているのである。さらに『ピエール』との関連でもう一つ注目しておく必要があるのは、エレンの信仰はアリスとジョンのキリスト教徒としての完璧性に対する信仰に支えられているとあってよいことである。ちょうどピエールの心の中に完璧な父の祠が祭られていたように、エレンの場合も母、アリス、ジョンが心に祭られているはずである。

以上のように見るとき、時代によって拒否された『ピエール』と、時代によって熱狂的に受け入れられた『広い広い世界』との間には、実は大変な共通点があることに気づく。しかしもちろんその違いもまた大きく、前者は後者のいまだ気づいていないことをはるかに見通していたということである。人間の意思の自由が強調され、その意志次第で道徳的に人間は完全へと近づけるとするとき、実は神の存在とその重要性は、ますます希薄になっていたのだということ、また、信仰心が心や感情に訴える形で求められるとき、信仰心を人間の持つ無意識的の欲望とはっきり区別するのは難しいということである。ウォナーは、完璧なエヴァンジェリズムの作品を書きながら、それが完璧であればある

ほど、彼女の知らない所で、エヴァンジェリズムのもつ危険性を露呈していると言いうことができるであろう。一方、メルヴィルはその危険性を十分に熟知していて、むしろそれを作品のテーマにしたのである。宗教的に“enthusiastic”であった時代は、実は不吉にも神の不在へと向かっているのだということ。メルヴィルは次作『信用詐欺師』においては、もっとアイロニカルに同じテーマを取り上げることになるが、この作品には、その時代の住人でありながら、時代の先を見透かしてしまった者の苦渋も感じ取ることができるのである。

## Notes

- 1) Emory Elliott (ed.), *Columbia Literary History of the United States* ((New York: Columbia University Press, 1988), p. 436.
- 2) *Pierre or, The Ambiguities*, ed. Henry A. Murray (New York: Hendricks House, Inc., 1962), p. 79. 『ピエール』からの引用はすべてこの版による。
- 3) *Pierre*, p. 34.
- 4) Leon Howard and Hershel Parker, “Historical Note,” *Pierre or, The Ambiguities* ed. Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1971), p. 383.
- 5) *Pierre*, p. 125.
- 6) 例えば、*O.E.D.* には、次のような定義が見られる。  
One who erroneously believes himself to be the recipient of special divine communications; in wider sense, one who holds extravagant and visionary religious opinions, or is characterized by ill-regulated fervour of religious emotion.
- 7) Alan Heimert, *Religion and the American Mind: from the Great Awakening to the Revolution* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1966), p. 177.
- 8) Perry Miller, *The Life of the Mind in America: From the Revolution to the Civil War* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1965), p. 7.
- 9) William G. McLoughlin, *Revivals, Awakenings, and Reform : An Essay on Religion and Social Change in America, 1607-1977* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1978), p. 113.
- 10) *Ibid.*, p. 114.

- 11) *Ibid.*, p. 116.
- 12) *Ibid.*, p. 117.
- 13) *Ibid.*, p. 123.
- 14) Perry Miller, p. 7.
- 15) *Ibid.*, pp. 10–11.
- 16) *Ibid.*, p. 9.
- 17) William G. McLoughlin, p. 122.
- 18) Perry Miller, p. 28.
- 19) *Ibid.*, p. 26.
- 20) *Pierre*, pp. 55–56.
- 21) *Ibid.*, p. 102.
- 22) *Ibid.*, p. 104.
- 23) *Ibid.*, p. 204.
- 24) *Ibid.*, p. 213.
- 25) *Ibid.*, p. 335.
- 26) *Ibid.*, p. 335.
- 27) Perry Miller, p. 16.
- 28) *Ibid.*, p. 7.
- 29) Susan Warner, *The Wide, Wide World* (New York: The Feminist Press, 1987)
- 30) Jane Tompkins, *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790–1860* (New York, Oxford: Oxford University Press, 1985), p. 176.